

あ　な　た　と　市　政　を　む　す　ぶ



広報  
No.238

# かんおんじ

## 8

August

2025 / 令和7年



戦後

# 80

年

いま、受け継いでおきたい

## 戦争の話







## 観音寺市内の 「戦時中に生まれた人」の数

|        |             |        |  |
|--------|-------------|--------|--|
| 81～85歳 | －終戦前1～5歳－   | 2,913人 |  |
| 86～90歳 | －終戦前6～10歳－  | 1,987人 |  |
| 91～99歳 | －終戦前11～19歳－ | 1,414人 |  |
| 100歳以上 | －終戦前20歳以上－  | 66人    |  |

(参考)  
性別・年齢別 人口集計表 (令和7年7月1日現在)



大野原中学校の被爆者体験伝承講話の様子

大野原中学校で、被爆者の体験伝承講話が5月9日に行われ、3年生88人が参加しました。講話を行ったのは、広島県在住の被爆者2世の中川俊昭さんで、母親から被爆の実相を聞いて育ち、現在は「被爆体験伝承者」として活動しています。9歳で被爆した御堂義之さんの話をもとに、全身に大やけどを負った人々が水を求めて川へとなだれ込む無残な光景などを説明したほか、戦時下の人々の暮らしや平和への思いを語りました。

この講話は、3年生が6月に修学旅行で沖縄県に行くのを前に、学びを深める機会として実施したもの。沖縄では平和祈念公園を訪れたほか、太平洋戦争時に負傷兵や住民の避難壕となった洞窟「系数アブチラガマ」を見学し、地元ガイドから沖縄戦の伝承講話を聞きました。市内中学校では、修学旅行で北九州方面(長崎・福岡)または沖縄を訪れ、戦争遺跡を訪問したり、戦争体験講話を聞いたりするなど平和学習を行っています。

### 原爆の怖さや恐ろしさ、一生忘れない

原爆が与える怖さや恐ろしさを知り、このことを一生忘れないでいようと思いました。国民全員が苦しんだ戦争が今後二度と起こることがないように、自分たちも次の世代に伝承し、平和を祈り続けたいです。

大野原中学校3年 森島 崇仁さん

### 戦争の悲惨さ、空しさを語り継がなければ

私は6人兄弟の末っ子で、一番上の兄が24歳でグアム島で戦死しました。昔、幼いながらに自宅の庭の防空壕から、詫間海軍航空隊を爆撃した後に、観音寺海軍航空隊の飛行場に向かう米軍のグラマン戦闘機を、北西の空に何回も何回も見たことを覚えています。

戦争を無くすために大切なことは戦争をよく知ることです。日本は80年間、戦争も無く平和でした。同時に、その間戦争のことをあまり知ろうとせずに過ごしてきたのではないのでしょうか。今日の平和は、戦没者の尊い犠牲の上に成り立っていることを決して忘れてはなりません。遺族連合会では、遺族が「語り部」として市内の子どもたちに戦争体験を話す取り組みができればと考えています。戦争の悲惨さ、空しさを語り継ぎ、どんなことがあっても戦争だけはしてはいけないということを分かってもらいたいと思っています。



観音寺市遺族連合会  
会長 石川 豊さん  
(84歳・吉岡町)

## 特集

## 戦後

# 80年

# いま、受け継いでおきたい 戦争の話



神風特別攻撃隊員(通称 特攻隊)。写真左は観音寺町の矢野弘一さん(昭和20年5月4日、出撃により23歳で戦死)



空襲による火災消火を想定した防火訓練のようす

戦後生まれが約9割に  
ことし、昭和20年8月15日の終戦の日から80年を迎えます。戦前に生まれた人は80歳以上となりました。総務省統計局が発表した令和6年10月1日現在の人口推計における80歳以上の人口は1289万1千人で、総人口の約1割となります。終戦時に生まれた人が80歳となると、戦争体験を語ることでできる人はさらに高齢となります。第二次世界大戦では満20歳に達した成年男子は全員徴兵検査を受ける義務があり、志願により14歳から入隊できました。観音寺市で94歳以上の男性は現在156人です。もし戦地体験を聞きたいと思っても、話せる

可能性のある人は156人しかないのです。いつか戦争の記憶を持つ人は誰もいなくなるでしょう。残された私たちは、受け継いだ記憶を語り継ぎながら、戦後100年、110年と平和を維持していかなくてはなりません。

### 戦争の記憶を受け継ごう

戦後80年となる今、これまで以上に必要なのは、一人でも多くの戦争の記憶を受け継いでいくことです。「情報」としてではなく、「記憶」としての戦争を知ること、他人事でなく、より自分事として想像力を持って受け取ることができるはずです。



## 教えてください、

## あなたの知っている戦争の話



請川 格さん（木之郷町）  
90歳・終戦時 10歳

朝鮮の人に助けられ、大事にされた

瓦職人だった父親は、戦時中は海軍で暗号兵をしていました。特殊任務で体を壊し、終戦後に帰ってきた時、真っ白な顔をして、体がブヨブヨとむくんだ父親を見て弟や妹は泣いて逃げました。

戦時中、飛行場建設のため立ち退きの指示がありました。3人の子を抱えた母には気力が残っておらず、立ち退きしなかったところ、軍隊が家に来て中を仕切ったと思うと、朝鮮人労働者の3家族と同居することになりました。従業員も連れていたので総勢50人での生活になりました。母神山の防空壕は、うちにいた安東<sup>あんとう</sup>さんと夏山さんが掘ったものです。当時は食べるものが不足していましたが、朝鮮人労働者には「特配」といって、豚の頭や牛のしっぽ、魚などの食料が軍から支給されました。それを私たちにも分けてくれ、「防空壕を掘っているところを見せてあげる」と連れて行ってくれました。優しく賢い人たちでした。終戦後、すぐに祖国に帰れないので1年近く一緒に生活しました。私は家族が戦死しておらず、爆撃を受けたこともないので、戦争の悲惨さは知りません。でも、戦時中に朝鮮の人に助けられ、大事にされたことで、人の情けや人への関わり方を知り、その後もよく彼らのことを思い出していました。



子川 美代子さん（吉岡町）  
95歳・終戦時 15歳

振り返ったとき、焼夷弾が  
雨あられのように落ちるのを見た

従軍看護婦になろうと、昭和20年4月に高松赤十字病院の看護学校に入学しました。当時は海軍病院で、傷病兵を収容していました。7月4日、警戒警報が空襲警報に変わったので院内の広場にあった防空壕に学生や病院職員、患者が皆で入りました。しばらくして警戒警報に変わったので外に出たところ、夜中なのに真っ昼間のように明るくなったと思うと、照明弾が落ちてきました。私は担当患者だった兵隊さんと2人で、郷東川に向かって逃げました。栗林公園に逃げた人は多くが亡くなったと聞きます。グラマン戦闘機が逃げる人を撃ちに急降下して来るのですが、兵隊さんが機体の音の変化で「伏せろ!」と言ってくれるので、何度も地面に伏せながら、朝までかけて郷東川の橋の下にたどり着きました。逃げる途中に振り返ったとき、焼夷弾の太い火の柱が雨あられのように落ちるのを見ました。高松の空は真っ赤で、私の故郷の豊中町桑山からも赤い空が見えたそうです。日赤病院はもちろん、高松の街は全焼しました。小さい頃から周りに軍歌が溢れ、「戦争には勝たないといけない」と教えられたので、「戦争反対」なんて思うことはありませんでした。戦争は味わったら哀れです。世界中から戦争がなくなったらいいと思います。



秋山 智さん（大野原町）  
96歳・終戦時 16歳

過酷だった勤労奉仕  
勝つための犠牲なら喜んで受けた

三豊農業学校（現笠田高等学校）に通っていましたが、戦争が激しくなると、授業は行われず、勤労奉仕に出ることが多くなりました。仁尾町薦島で、豊浜砲部隊の船が隠れるための小さいトンネルを掘ったり、観音寺飛行場へ作業に出たりしていました。当時の高校生はみんなどこかの現場に配属され勤労奉仕に出ていたと思います。過酷でしたが、戦争に勝つことだけを考えて頑張っていました。ある日、柞田町北岡の橋の近くで、アメリカ軍の戦闘機から爆撃を受けたことがあります。急降下と爆撃を2〜3回繰り返され、さすがにもうだめかと思いましたが、奇跡的に弾は当たりませんでした。長い年月が過ぎ、戦時中の記憶は薄れてきていますが、このことは今もはっきりと覚えています。市内の飛行場をめがけた爆撃は数回あり、よく戦闘機を見たことも覚えています。

あの頃、日本は戦争に勝つものだと思っていました。観音寺でアメリカ軍の攻撃を受けるようになったときは、本当に勝てるのか不安に思ったこともありましたが、負けるとは夢にも思わず、勝つための犠牲なら喜んで受けました。戦後80年が経ち、世の中も人も大きく変わりましたが、人を殺す戦争は絶対にしてはいけないと強く思います。



新田 幸雄さん（柞田町）  
99歳・終戦時 19歳

帰ることのない特攻隊を  
戦闘機で先導する任務だった

戦時中は海軍の戦闘機パイロットでした。第三四三海軍航空隊で松山基地におり、観音寺飛行場でも勤務しましたが、昭和20年6月に松山へ戻り、九州の鹿屋基地に行きました。そこで私に与えられたのは、特攻隊を戦闘機で沖縄付近まで先導する水先案内人の任務でした。特攻隊というと、映画などのイメージで爆弾を装着できる立派な航空機に乗っているように思うかもしれませんが、実際は250キログラムの爆弾を脚に針金でくくりつけた、重くて飛びかねているような機体です。5、6機出撃して、敵艦隊に追突できるのは1機くらいで、ほとんどは追突前に米機に撃ち落とされていました。私は帰ることのない特攻隊を多い時は1日に2回、沖縄近郊まで連れて行って行っていました。終戦後に戦死した人の仏参りをしようと遺族を訪ねても、家に入れてもらえませんでした。肉親にしたら、私は鬼の片割れのようなものだったのでしょう。戦後、同僚兵と集まっても、いつも当たり障りのない話ばかりで、誰も戦争の話はしませんでした。私はけがもせず、こうして99歳まで生きてきました。これまで取材の依頼があっても、戦争のことは一切話してきませんでした。戦後80年のきっかけでお話しましたが、遺族を思うと本当は話したくなかったです。





## 平和を願い、戦没者に黙とうをささげましょう

原爆死没者など、大戦において亡くなられた人々を追悼し、平和を祈念するため、黙とうをささげましょう。 問い合わせ先 危機管理課 ☎23-3940



### ●広島、長崎に原爆が投下された日

日時 8月6日(水)午前8時15分から1分間  
8月9日(土)午前11時2分から1分間

### ●戦没者を追悼し、平和を祈念する日

日時 8月15日(金)正午から1分間

### 原爆被爆パネル展 高校生平和ポスター展

日時 8月6日(水)～15日(金)  
※最終日は午後4時まで

場所 市役所1階エントランスホール

## 観音寺市民の戦争の記憶をまとめた本

戦争体験者の証言や、市内に残る戦争遺跡や関係資料などをまとめた本です。戦争の記憶を受け継ぐために、ぜひ一読ください。文化振興課や大野原中央公民館、豊浜中央公民館、ふるさと学芸館で販売しているほか、市内各図書館で貸し出ししています。

### 問い合わせ先

文化振興課 ☎23-3943 ☎23-3956  
E:bunka@city.kanonji.lg.jp



定価2000円(税込み)

## 観音寺市ふるさと学芸館

大野原町丸井313番地  
(旧 紀伊小学校)

### 常設展示「平和の部屋」



戦時中の貴重な資料や、杵田町にあった観音寺飛行場のジオラマなどを展示。広島県産業奨励館（現在の原爆ドーム）の壁面に使われ、市内の讃岐煉瓦株式会社が製造した「被爆レンガ」の実物も展示されています。

### 企画イベント「平和へと導く心の羅針盤」

未来を生きる人たちが安心して暮らしていけるよう、平和への願いを込めたメッセージを募集します。メッセージの一部は、市ホームページで紹介するほか、ふるさと学芸館に展示します。市内外を問わず、誰でも参加できます。皆さんからのメッセージをお待ちしています。

●期間 8月1日(金)～31日(日)

### ●メッセージ送付方法

ふるさと学芸館で記入  
またはメールやFAX  
で送付

### ●受付期間

8月15日(金)まで

### 問い合わせ先

ふるさと学芸館  
☎☎24-8123  
E:furusatogakugeikan@snow.ocn.ne.jp



昨年の展示のようす

## アメリカから届いた叔父の日章旗



成岡 義一さん  
(68歳・栗井町)



成岡 明さん

昨年5月23日、米兵が戦利品として持ち帰った日章旗が、79年振りに遺族に返還されました。日章旗の持ち主は栗井町出身の成岡明さん。航空機や飛行場の整備などを任務とした第134飛行場大隊に所属、フィリピンに出征し、昭和20年5月20日に23歳でルソン島マニラ東方の山地で戦死しました。

日章旗には「祝出征」の文字と共に、会社名と同僚だと思われる約20人の名前が記されています。当時は、ほとんどの兵士が、武運長久を祈って署名やメッセージが寄せ書きされた日章旗を身に付けて戦地に赴いていました。そして、欧米諸国の兵士にとっては敵軍兵士の戦利品、特に日章旗を持ち帰ることは名誉なこととされてきました。明さんの日章旗を返還した米国アイダホ州のボブ・ブルーイントンさんの父親は元米兵で、戦場から戦利品として持ち帰り、大切に保管していたそうです。

旗を身に付けて戦地に赴いていました。そして、欧米諸国の兵士にとっては敵軍兵士の戦利品、特に日章旗を持ち帰ることは名誉なこととされてきました。明さんの日章旗を返還した米国アイダホ州のボブ・ブルーイントンさんの父親は元米兵で、戦場から戦利品として持ち帰り、大切に保管していたそうです。明さんの甥の義一さんは、「叔父の日章旗があつたと聞いたときはとにかく驚いた。80年近くも経ち、捨ててしまってもおかしくないが、遺族に返したいと思ってくれ、そして返還を支援する団体がいたから、こうして返ってきた」とし、「叔父の遺骨は返ってきていないので、身に付けていた日章旗が故郷に返ってきただけでも良かった。父も生きていたら喜んでいただろう」と話します。

### ボブ・ブルーイントンさんからの手紙（和訳）

あの戦争は、世界にとって暗黒の時代でした。残念ながら、私の父がこの品物をどのようにして入手したのかは分かりません。生前の父は、多くの人がそうだったように、戦争についてあまり話ませんでした。この品物の返還により、ご家族の皆さんの心に平穏がもたらされることをお祈りしております。

